

都心にふさわしい図書館を考える懇談会 第1回会議

議事録（概要版）

日時：平成24年9月28日（金）午前10時開会

場所：札幌市中央図書館 3階 研修室B

1. 開会

2. 中央図書館長挨拶

●長谷川中央図書館長

この懇談会は、札幌市の都心に複合施設の中に設置する都心の図書館施設の機能のあり方について、様々な分野でご活躍される皆様のご意見をいただく目的で設置するものである。

3. 委員紹介

●事務局（千葉調整担当課長）

当懇談会は図書館協議会の専門部会的な位置付けとし、会議結果を図書館協議会にフィードバックし、更に検討を重ねていく予定。

●猪熊委員

オオドオリ大学という取組をやっているのですが、校舎は特になく、街をキャンパスにということで、図書館も使わせていただいたことは何度かあります。よろしくお願いいたします。

●河村委員

専門は図書館情報学ということで、図書館の設置をテーマとして研究しておりますので、今回お声をかけていただきました。どうぞよろしくお願いします。

●菊地委員

何年間か前に図書館協議会で一緒に、いろいろ勉強させていただいた方もいらっしゃり、心強いです。放送作家というのは、シナリオライターの集まりのようなものなのですけれども、その取りまとめなどをやっております。よろしくお願いいたします。

●豊田委員

会社はバーソン・マーステラというPRエージェンシーに所属しております、こちらでライブラリアン的な色々な情報収集の調査などを担当しております。ビジネス支援推進協議会は立ち上げの時期からずっと関わってきた、私のライフワークみたいなところ

ろです。今回ここにお呼びいただいて、参加できて、とても光栄に思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

●細谷委員

30年以上、北2条西12丁目に図書館というものが1館しかなかった時代からずっと札幌で図書館づくり運動を進めてきております。都心にふさわしい図書館については、市議会に2回陳情を出しております。最初に文教委員会に出したのと、その後、複合施設構想が浮上ってきて、確か総務委員会だったかな、それで一時は動くかと、今の札幌駅、紀伊国屋書店がある辺りにかなり構想が具体的になって、やっと都心部に図書館が出来るかと期待したら、それがだめになりということの繰り返しで、実は札幌市は都心部は図書館空白地帯という時代が長く続いてきておりまして、もう、私が元気なうちには、これは形にならないだろうかと思っていたところにとっても嬉しいお話が舞い込んで来まして、喜んでいます。どうぞよろしくお願いいたします。

●事務局（千葉調整担当課長）

---事務局の紹介---（省略）

4. 議題

（1）座長選出

菊地委員より河村委員の推薦があり、全員一致で選出。

●河村座長

（挨拶の後）新聞報道にもあるように、構想が進んでいる中、あまり長い期間をかけずに、ざっくばらんに、都心にふさわしい図書館に必要な機能を検討し、協議会に提出したい。

●事務局（企画調整担当係長）

---資料説明---

- ・札幌市の一般的な図書館については市内全域にサービス網を整備済みという認識。
- ・平成20年に策定された市民交流複合施設の基本計画では、「さまざまな市民が集い、交流し、札幌の魅力を国内外に積極的に発信していく場」果たすべき役割として「札幌の文化芸術を支え、育てる。文化芸術とIT、観光、ビジネスを連携する。」といった役割を担うこととされている。
- ・平成24年1月策定の「札幌市第2次図書館ビジョン」の理念では、「市民の生活や創造的な活動を支える知の拠点となる図書館」ということで、第1次ビジョンによって築き上げたサービス基盤を基にしながら、サービスの質の向上を図っていこうという計画。

基本方針1…市民の生活や活動に役立つ図書館

基本方針2…本・人・文化を結ぶ図書館

基本方針3…広く情報を発信し、市民とともに成長する図書館

これら 3 つの基本方針により、主な施策の方向性として、歴史や文化に関する資料を含む幅広い分野の資料収集、レファレンス機能の向上、電子サービスの充実、新たな文化との出会いの場の提供、積極的な情報発信、市民・各種団体との協働、こういったものを目指して取組んで行くこととしている。

- ・札幌市の都心部の特徴は、ビジネスパーソン、観光客が多数集い、交通の便がよく、市内各地から多数の市民が気軽に集える場所というのが挙げられる。また、大規模な書店が複数立地している。更に、札幌の都心部には、札幌の文化歴史など含めて、札幌の魅力を一望できる場所がなく、これからつくる図書館でその機能を担えないかということを検討している。
- ・基本コンセプトについて、前提となる考え方は、「既存の図書施設とは異なる都心ならではの特色を有する」ということ。そのため基本コンセプトとして、サービス機能を重点特化した 3 つの案を事務局で作成。

1 調査研究支援…ビジネスに関する資料の提供（ビジネスパーソンをターゲットと想定）

2 札幌の魅力を発信…札幌の自然・食・文化芸術・スポーツ・歴史に関する資料など

3 都心の知的空間…市民が時間を有効に使える知的空間を提供

- ・空間構成は「静の空間」と「動の空間」の 2 つ。

静の空間…調査研究を支援する空間。キャレル席、ミーティング・プレゼンテーションルーム、充実したデータベース、パソコン環境などを有し、図書館員が必要に応じて相談、対応。蔵書は、専門書、統計資料、ビジネス雑誌、業界紙、市内の企業の企業情報、社史、有価証券報告書、CSR 報告書、その他広くビジネスに関する資料。

動の空間…札幌の魅力を発信する空間、知的創造と憩いの空間。読書、打ち合わせ、グループ研修等を可能にする配置可変の読書環境とカフェとの連続性。図書館員による資料面でのサポート。蔵書は札幌の魅力発信を実現するための、歴史・食・自然・スポーツなどの分野の札幌をテーマとした資料。複合施設内アートセンターとの連携として芸術分野の資料を想定。更に、一定期間ごとのテーマ展示によるセレクトライブラリーを図書館内外との協力により運営。

- ・市民交流複合施設が入る北 1 西 1 再開発ビルの概要は、放送局、オフィスが入る約 150 m の高層棟、客席 2,300 席の大ホールその他、図書館、アートセンターなどが入低層棟（＝市民交流複合施設）という構成で設計されている。（地下は駐車場）

図書館及びアートセンターは低層棟の 1・2 階に計画されている。

●河村座長

札幌市の図書館ネットワークの整備完了ということ、市民交流施設との複合であるということ、大通という立地などを視野に、実現可能かどうかは別として、必要な機能などをそれぞれの立場からお聞きしたい。

●細谷委員

この懇談会の今後のスケジュールを示していただきたい。

●事務局（企画調整担当係長）

基本コンセプトを 10 月中に固めたい。その他の細かい機能はさらに時間をかけて検討する予定。

そのため、10 月中旬にもう一度懇談会を開催し、結果を 10 月下旬に図書館協議会に報告したい。

●細谷委員

交流複合施設検討委員会に出ていたアート関係のアーカイブ機能も入るか。

●事務局（企画調整担当係長）

市民交流複合施設の 1 階と 2 階で、図書館と共存する形で入ることを想定している。

●細谷委員

図書館の床面積をどの位と想定しているのか。

●事務局（企画調整担当課長）

2,000 m²を想定している。（地区図書館の平均が 1,200 m²、中央図書館のワンフロアが 2,000 m²）

●細谷委員

現在の紀伊国屋書店の場所に、メルパルクと複合の都心にふさわしい図書館を構想されていた時に、中央図書館案では 3,000 m²に 30 万冊規模だった。3,000 m²は確保できるかどうかという見通しはあるか。

●事務局（調整担当課長）

メルパルクの時も、最低限必要なのは 2,000 m²と考え、戦略的に 3,000 m²で一旦計画した。今回も 2,000 m²は確保できるよう進めたい。

●事務局（企画調整担当係長）

市民交流複合施設の 1 階と 2 階を合わせて 2,000 m²である。（必ずしも 1 階 1,000 m²、2 階 1,000 m²という組み合わせではなく、合計面積が 2,000 m²）

●河村座長

これまでの図書館は子どもからお年寄りまで幅広く利用対象としていたが、事務局案を見ていると、ビジネスパーソンという言葉にもあるように、限られたスペースで、誰を対象とし、どんな機能が必要かという検討が必要。

●菊地委員

中央図書館機能は現在の場所で継続しつつ、新たな機能を都心に持っていこうという議論と理解して良いか。

●河村座長

中央図書館を大通に移転するイメージとは違い、ターゲット・機能を絞ると考えると、蔵書数が多いだけの図書館で満足が得られるかどうか疑問。極端に言えば、蔵書を雑誌に限定するといったような、奇抜な方針で行かなければ、普通の分館を大通に作ったという

ことにしかない。

●猪熊委員

北1西1という場所柄、ビジネスパーソンのイメージは理解するが、都心に集う家族層のことも考えたい。また、ビジネス書というと、情報の流れが速く、資料の選定などソフト面も具体的に見ていきたい。

個人的な意見としては、居心地の良い環境づくりということで、椅子などの備品や内装、空間構成に興味がある。

●菊地委員

中央図書館等とネットワークしながら、より都心にふさわしい観点で考えるべき。都心に集まる昼間人口で考えれば、ビジネス層が利用出来るというのは魅力的であり、一方で都心集中型の札幌市の交通の仕組みを考えると、ファミリー層の利用も期待できる。更に先に視点を向け、新幹線が出来ると、札幌市内ばかりではなく、道央圏、旭川くらいまで札幌の都市機能としては目配りしても良い。

そう考えて、あれも、これもと考えると 2,000 m²ではとても足りない感じがするが、絞り込んでより良いものにしていくということ。事務局のコンセプトは、マスメディアで言う「広場機能」という印象。コミュニケーションの広場、つまり情報が集まり、そこから新たな情報が発信される。このようなことを考えると、とても魅力的な場を作り上げることが出来ると考える。

●豊田委員

皆さん合意されているかと思うが、やはり「総合ライブラリー」は無理で、単機能に機能を絞らざるを得ないと思う。その機能をどう絞るか考えた時に、単なる分館にしても仕方がない。非常にユニークなオンリーワンライブラリーとすべきである。私がひとつ考えているのは、映画やドラマなどのロケ地の情報を映像資料なども含めた形で提供し、札幌市民のみならず、札幌を舞台に仕事をしていこうとする人々にアピールしていくこと。

もうひとつは、市議会の資料や、札幌市や道内で実施された様々な調査の報告書を収集し、ここにしかないコレクションを構築していくこと。この二つを入れられたら魅力的なライブラリーになるのではないかな。

●細谷委員

(資料について) 背景のところに、「これからどういう時代になっていくのか」という視点を入れるべき。また、面積については 2,000 m²では少ないと感じる。

豊田委員の発言のように、総合ライブラリーは難しく、オンリーワンライブラリーを目指すという考えについては同感だが、蔵書数について 30 万冊規模は欲しい。札幌は、70 万冊規模の中央図書館の次が 8 万冊規模の地区図書館。住民ニーズとしては、総合ライブラリーではなくても、30 万冊程度の規模は必要と考える。

また、横浜市中央図書館の例のように、法律情報サービスや医療情報サービスなど、生活支援という観点も重要である。

文言として挙げられていないが、NPO を視野に入れることも必要。

●河村座長

座長ではなく、一人の委員としての意見は、豊田委員の機能を特化させるという発言と近いところがある。

蔵書数については、各区 20 万人の人口に対し、地区図書館の 8 万冊の蔵書というのは、不満が起こって当たり前だが、だからと言って、蔵書数をいくら増やしても、利用者が読みたいと思う本に出会えなければそれは「十分でない図書館」ということになってしまう。

非常に難しいが、利用者層を特化させるという時に、ビジネスという言葉もあったが、あまり絞り込まず、「大人」をターゲットとするのはどうか。

資料面では、普通の図書館とは違うことを実践したい。本（蔵書数）は他の図書館ネットワークに任せて、極端に言えば、速報性の高い雑誌に特化するなど。雑誌で構成していくと、従来の「滞在型利用」から「立ち寄り型利用」に利用行動が変化し、これまでの非利用者層の利用も期待できる。

今日は「都心にふさわしい」というイメージをどこまで共有できるか、大まかなところをお話いただき、次回はより具体的に話し合いたい。

●細谷委員

議会図書室をこの都心にふさわしい図書館に移設し、スペースや予算を配分することは可能か。

●事務局（中央図書館長）

議会図書室については、議員のニーズに応え、最近場所を移している。更なる移設については、容易ではないと思われる。

●細谷委員

議会のすぐ傍という意味では、豊田委員の発言のように、行政情報あるいは議員が必要とする資料も当然考えて行くべき。

蔵書数について、中央図書館が開館した時は開架が 18 万冊くらいだったと記憶しているが（現在は三十数万冊）、開館直後に近くに住む友人が中央図書館を利用し、「ちっとも見たい本がなかった」と言っていた。あちこちの図書館を見て、やはり 20 万冊近く蔵書がなければ「本が（十分に）ある」という感じがしない。

河村委員の「雑誌に特化」という考えは、ユニークではあるが、これまでの非利用者層や道内の図書館未設置市町村から来る人にとって不都合。

●河村座長

蔵書数について、利用者の不満は尽きない。ただし、都心にふさわしい図書館という与えられたテーマの中で、単に多くの蔵書を取り扱うというイメージはやめた方がいいと考えている。

20 万冊規模の図書館を都心に作って、他の都市と何が違うのかということを考えてい。現状の図書館ネットワーク以外の機能を付加した図書館というイメージ。

●豊田委員

ビジネス支援図書館協議会が広がっていった一つの要因は、予算決定権を持つ人たちへのアピールという側面がある。マスコミ等を戦略的に利用し、非利用者層や予算決定権者にとっての図書館のプレゼンスを高め、最終的にはよりよい図書館づくりにつながっていくという考え方。都心にふさわしい図書館もそのような役割が出来るのではないかな。

雑誌に特化するという考えは面白いと思っている。ここには一般の本を置かず、レファレンス資料、雑誌だけを置き、貸出しは一切行わないというコンセプトはあると思う。

また、充実したデータベースと連動した地元新聞、雑誌、業界紙などを揃えて行くことはとても訴求力がある。

●河村座長

やはり、「負けない」ものでなければならない。図書館より書店の方がいいと思われるようなものではない。

皆さんには、都心にふさわしい図書館で、大型書店などに負けない機能はどんなものと考えてるかお聞きしたい。

●菊地委員

ICT (Information and Communication Technology) という考え方。つまり、都心に集まる、日常的に情報を必要としている人たちに、「ここに来れば欲しい情報が得られる」という環境を作る事。

さらに先を見越して考えると、「この向こうには何百万冊という蔵書がある」という世界をキーステーションとして活かせる場だということ。このくらいのスケールで考えると、都心にあることの、オンリーワンの特色が出てくる。

●河村座長

限られたスペースのことも考えると、ここでは「図書館」という概念を変える方がいいのではないかと感じる。

●細谷委員

官制ワーキングプアやホームレスなど、支援を必要している人にとって「ここは自分のための図書館ではない」と思わせることは避けたい。

河村委員や豊田委員の意見をいわゆる「目玉」として打ち出すことに異論はないが、家族層への配慮や、生活支援という視点は考えて行くべき。

●河村座長

「みんなを満足させる」ということが難しい中で、図書館を利用していない人、今までの図書館に不満を持っている人、利用者登録をしている四十数パーセント以外の人たちを引き込む大きなチャンスだと思う。このチャンスがある時に、今までの図書館行政の概念を変えることが必要だと思うがどうか。

●猪熊委員

「広場」という言葉があったように、私もスーツ姿の人たちだけがいる場所に行きたい

とは思わない。細谷委員の発言のように、これからの時代のイメージが必要で、ある意味戦略的な部分に加えて、子どもたちであったり、これからのビジネスパーソンであったりをどう捉えていくか注目したい。ビジネス利用であれば、ネット上で実現出来るサービスもあると思う。

風景として、図書館は、公園のように、本の緑があるようなイメージというのは、なくしたくない部分。将来もそうありたいというイメージがある。

●細谷委員

雑誌だけというのには抵抗があるが、本も0類から9類まで揃えなければならないとは考えていない。

その反面、市民交流複合施設という性質上、劇場が併設されて、周辺には映画館などもあり、芝居や映画を観た後、原作を読みたいというニーズも少なからずあると思う。

●河村座長

私は、調査研究をする時、図書館の本に線を引くことは出来ないため、自分で買うことが多い。

図書館で良く使うのは、雑誌であり、雑誌の複写である。専門誌などは、限られた範囲の一部分を複写し、全てが欲しいわけではない。そこで、専門雑誌とブラウジング用の柔らかい内容の雑誌を置くのが良いと考えている。

●細谷委員

今まで図書館を利用していなかった人たちを取り込みたいという思いは私も同じで、その中には、図書館という文化的な施設に自分は縁がないと思っていた人たち、立地条件から考えて、行き場のない人たちの利用も考えられる。そういう人たちが「ここは使える場所だ」という出会いをするためには、雑誌だけでは苦しいだろうと思う。

そして、自分がこれまで調査研究に図書館を利用した経験から、多くの資料を並べ、その中から必要な本を選ぶ作業が重要だった。図書館を「本を選ぶ場所」として利用してきた。

●河村座長

選ぶ場所としてそのような使い方はもちろんあると思うが、その機能が大通に必要かということ。あれも必要、これも必要とやっていると難しくなってしまう。

与えられたスペースの中で、サービス、ターゲットを絞っていくという時に、皆さんとコンセプトを共有したいと思う。

機能をいろいろ盛り込んで、雑多なものにしてしまうか、それとも他の機能は今までの図書館に任せて、ここでは今までの図書館の考え方と違った特化したものとするのかというところだけ、共有できれば、次回さらに進めることが出来ると思うが、他のご意見は。

●猪熊委員

「調査研究支援」という言葉から、蔵書の冊数的なイメージというのはやはり強くなってしまう。その他の魅力発信や都心の知的空間というところは割と入りやすいが。

●河村座長

ここでいうビジネスパーソンというところを、都心を通過する人たちが立ち寄れる場所というイメージで捉えている。調査研究支援というあまりに大きいイメージ。

●細谷委員

児童サービスとは言わないまでも、親が連れてくる子どもをどう扱うかは考える必要がある。

●事務局（中央図書館長）

（補足）市民交流複合施設全体として、託児所やキッズルームのようなものは考えられている。

●豊田委員

「都心にふさわしい図書館」と言ってしまうと、イメージとしては一般的な図書館を期待してしまうだろう。これまでの図書館としてのレベルアップはやはり中央図書館でやるべきこと。

ここは、良い名前を付けるなどして、図書館という言葉から離れて、都心の情報センター機能として考えなければ、市民の納得は得られない。

この案で、セレクトライブラリーというのは非常に良い案で、小さなコーナーに、例えば映画の原作を並べたり、その時々テーマを図書館テイストで並べることで、機能していくのだと思う。

●細谷委員

「これは中央図書館で」というには現在の中央図書館の立地条件が悪すぎる。

やはり多くの市民が訪れることのできる都心部に 20 万冊、30 万冊規模の図書館が必要。スペースの制約があるならば、中央図書館との連携を密に、一体的な蔵書の活用を考えて行けばよいと思う。

●河村座長

まず、この基本コンセプトとして、札幌市の図書館ネットワークの中の一つの図書館だという考え方と、それとは別物の新たなコンセプトの施設にするという考え方、どちらにするかということになるかと思うが。

●菊地委員

コンセプトについての議論ということで、言葉としては「レファレンス機能」と「ICT」を入れたい。既存のものは十分活かすとして、これから 10 年先の状況をイメージして機能させた方がいいと思う。そうすると、独創的なイメージが描けるのではないかな。

●細谷委員

中央図書館が北 2 条西 12 丁目にあった時には、2 階のレファレンスコーナーには、ビジネスパーソンの利用は多くあった。そのため、都心部に図書館施設を作れば利用は見込まれるが、「ビジネスパーソンをメインターゲットに」という言い方をしてしまうと、実際にビジネス支援を必要としている非正規雇用だったり、あるいは小さな自営業をやっている

人たちへの支援が弱く感じてしまう。ワーキングプアだとか失業者の力にもなれるという意味を含んだ言葉の使い方をしたい。

●河村座長

イメージとしては大人の図書館。かといって、子どもを排除するわけでも、全てビジネスに関する本を置くわけでもない。確かにビジネスパーソンという言葉は変えてもいいかもしれない。

●細谷委員

基本的なコンセプトはこの 3 つの機能で良いと思うが、「調査研究支援」というところにはやはり「生活支援」というような考え方を組み込んで行きたい。

●豊田委員

第 2 次図書館ビジョンの基本方針「市民の生活や活動に役立つ図書館」を踏まえて考えるとビジネスパーソンというのは行き過ぎている感がある。調査研究支援も「課題解決支援」という言い方でも良い。

●河村座長

今日の議論を踏まえて、もう一回くらい基本コンセプトについて議論したい。

●菊地委員

コンセプトの象徴として、ネーミングも重要。

●河村委員

図書館のネットワークの中の一つの施設を作るという形とはまた別に、図書館という言葉を取ってしまった形で行くかということも含めてご検討いただきたい。

●事務局（調整担当課長）

コンセプトをもう少し練りたい部分と空間構成まで含めると、あと一回では足りないと思われるので、日程調整をしながら、早い時期に第 2 回を開催したい。

---日程調整---

第 2 回 10 月 9 日（火）10：00～（研修室 B）

第 3 回 10 月 23 日（火）10：00～（会議室）

●河村座長

次回に先駆けて、基本コンセプトが共有できたことを想定して、以下をご検討いただきたい。

- ・必要な設備、施設の具体
- ・開館時間
- ・一部有料のスペースについて
- ・図書館のネーミング